

信頼と偏見のユダヤ史

ユダヤの伝統と現代イスラエルはどう違うのか

鶴見 太郎

(東京大学大学院総合文化研究科・教養学部)

信頼と偏見

< 2つの「信頼」 >

1) 社会心理学の「信頼」：相手に対する好意的な期待

例) 9回のマウンドは、エースを信頼して任せる。

2) 社会学の「信頼」：知と無知の中間状態（ジンメル）、社会的な複雑性の縮減メカニズム（ルーマン）

例) この人は〇〇大学を出ているから大丈夫だろう。／〇〇省に対してはこのように対応しておけば認可をもらえるだろう。

< 偏見 >

明確な根拠に基づかない一面的な先入観・固定観念

信仰と信頼

○「信頼・信用・信仰のあいだには密接な関連」 (ジンメル)

<ユダヤ教における信仰>

行動を伴う：信仰している以上は、聖書を信頼し、指示に従って行動するのが当然。信仰しなければ神に罰せられるという信頼（予期）。

→ そのことを共有するのがユダヤ教徒。可視化された信仰によって仲間内の信頼を得る。

○信頼は金融や商業の基盤（信用）



バール・ミツヴァ（成人式）の儀式でトラーを讀む少年（エルサレム）
<https://www.britannica.com/topic/Jew-people>

中世イスラーム世界のユダヤ社会の例

<ユダヤ人の男子教育>

5歳でヘブライ語聖書全体

10歳でミシュナー（口伝トーラー）の基礎の学習

13歳でミツヴォート（成人して果たすべき戒律）

18歳で結婚

20歳で義を求め

30歳で力に満ち

40歳で知恵に恵まれ云々



子ども用のアルファベット入門書（カイロ・ゲニザ）

Phillip I. Lieberman ed., *The Cambridge History of Judaism* Vol. V, 2021

中世イスラーム世界のユダヤ社会の例

- 学問以外にも多くが商業と手工業を学ぶ。
- 有力な商人の子弟は他の有力な商人の元で長期間研鑽を積む。
- 有力な商人と子弟の関係をタルビーヤ（教育）と呼ぶ。これがのちに両者間の強固で長期にわたる絆の形成に寄与。
- タルビーヤが各地のユダヤ系閥閥の形成に寄与し、親密で強固な人的ネットワークの形成に寄与。

中世イスラーム世界のユダヤ社会の例

- 破門（ラビ法廷による法律上の罰の様式の一つ）

最も軽いもの：1日（パレスチナでは7日）、大人しく家に籠る。

次に軽いもの：7日間（パレスチナでは31日）、金銭問題に課される場合は、違反者はまず公的に3度シナゴグにおける通常の礼拝の際に警告。期間中は直接の家族を除き誰も違反者と交流してはならない。違反者は喪に服し入浴、散髪、靴を履くことは控える。もし死ねばその棺に石が一つ置かれるのみ。改悛するまで法廷が日程を自由に決められる。

最も重いもの：無期限、生存に必要な最低限なものを除き、いかなる者も違反者との接触禁止。

中世イスラーム世界のユダヤ社会の例

- イエメンのアデンのユダヤ共同体には破門を宣告する資格を持つ幾人かの学者を含む有力な商人たちが存在。
- スペインの四つの都市のユダヤ当局から破門された男。エジプトに逃亡。
- しかしそこで最も影響力のあるナギッド（ユダヤ教徒の長）に破門されてしまう。

嶋田英晴「中世イスラーム世界のユダヤ社会における教育と破門の機能について」勝又悦子他編『一神教世界の中のユダヤ教』リトン、2020年より

非ユダヤ人からの信頼

- ユダヤ人同士の信頼により構築したネットワークによる経済的な強さにより、各地の非ユダヤ人の貴族から請われる。
- 農村に入り込み、農民と直接取引することで、（嫌われるだけでなく）農民からの信頼もある程度得る。

例) リーマン・ブラザーズの起源

1844年にドイツから移民したヘンリー・リーマンはアラバマ州モントゴメリーで乾物屋を開く。やがて店の客である奴隷農園からの支払いに現金の代わりに綿花を受け付けたことがきっかけで、綿花取引に参入。



ポーランドのユダヤ人街での結婚式（1893年）

<https://www.myjewishlearning.com/article/jews-in-poland/>

ユダヤ人に対する偏見

- 古い信仰に固執（「旧約」）
- 金持ち／金に汚い（『ヴェニス商人』のシャイロック）
- 肉体労働（農業）をしない
- 血の中傷
- 国際的支配の陰謀
- 資本主義の権化
- ボリシェヴィキ／共産主義者



15世紀 ニュルンベルク年代記 (Wikipedia)

偏見をめぐる諸々

<悪循環>

有力者の庇護下に入ることによって攻撃から保護してもらうのが基本

→ そのことがかえって偏見を助長

<利用>

ユダヤ人の世界的なつながりや政治力という偏見を外交的に活用

<真に受ける>

- シオニズムやソ連の極東自治州などの農業入植推進運動
- シオニズムにおける「筋肉質のユダヤ人」構想

イスラエル建国後の「信頼」

<原資は信頼から力へ>

V・ジャボティンスキー「鉄の壁」(1923年)

修正主義*シオニズムの原理に。

*公的には反主流派を形成、地下軍事組織イルグンやレヒなども。建国後は「ヘルート」党を経て「リカード」党

<成功体験と失敗体験>

- 4回にわたる中東戦争を経て、ついにエジプトと和平(1979年)。2020年にはアブラハム合意。
- 外交交渉によるオスロ合意ののち、状況はかえって悪化。

イスラエル建国後の偏見

< 偏見に基づく力の行使 >

○ 日常的次元：レイシャル・プロファイリング

○ 対外的次元：「テロ組織」に対する認識

B・ネタニヤフ『テロリズムと闘う－民主政はいかに国内・国際的テロリストを打ち負かすことができるか』（1995年）

まとめ

- ユダヤ人がマイノリティであるとき、信頼は生き抜くうえでの原資であった。
- シオニスト運動やイスラエル国家では、力を持つことが相手のある意味での信頼を得るカギとされるように。
- 力の行使が偏見に基づくケースも目立つように。
cf. 社会心理学における「偏見」と「差別」の違い：偏見は認識、差別はそれに基づく行動
→ 力を持つほど、偏見を行動に移しやすくなる。